

1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	0471500835
法人名	社会福祉法人 田尻福祉会
事業所名	グループホーム ひだまり
所在地 (電話番号)	〒989-4302 宮城県大崎市田尻大貫字境36-1 (電話) 0229-38-1531
評価機関名	NPO法人介護の社会化を進める一万人市民委員会宮城県民
所在地	仙台市宮城野区榴岡4-2-8 テルウェル仙台ビル2階
訪問調査日	平成20年 9月 8日

【情報提供票より】(平成20年8月18日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成14年 4月 22日
ユニット数	1 ユニット
職員数	10 人
利用定員数	9 人
常勤 8 人, 非常勤 2 人, 常勤換算 8.6 人	

(2) 建物概要

建物形態	○併設/単独	○新築/改築
建物構造	木造り	
	1 階建て 1 階 ~	階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	21,000 円	その他の経費(月額)	18,000 円	
敷金	有() 円		○無	
保証金の有無 (入居一時金含)	有() 円	有りの場合 償却の有無	有/無	
食材料費	朝食	円	昼食	円
	夕食	円	おやつ	円
	または1日当たり		1,200	円

(4) 利用者の概要(月 日現在)

利用者人数	9 名	男性	1 名	女性	8 名
要介護1	2 名	要介護2	2 名		
要介護3	4 名	要介護4	1 名		
要介護5	0 名	要支援2	0 名		
年齢	平均 83 歳	最低 75 歳		最高 89 歳	

(5) 協力医療機関

協力医療機関	大崎市民病院田尻診療所、加藤歯科クリニック等
--------	------------------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

このホームは、旧田尻町の中心地から北東方向に車で10分程の小高い丘にあり、付近は農家が点在し、水田や畑に囲まれた純農村地域である。隣接地には小学校、その先には公民館、公園、幼稚園等がある。入居者は、毎日子どもたちの登・下校の様子が眺められ、調査日にも体育館でスポーツをしている子どもたちの歓声が聞こえ、地域の中にあるホームという印象を受ける。ホーム開設後6年になり、①ホームの地域災害援護施設への組み入れ、②付近農家からの旬の野菜等の差し入れ、③地域住民による見守りなど、地域との良好な関係が構築されている。また、ホーム内には地区主催の敬老会や幼稚園の運動会の招待状などが掲示され、これには入居者の多数の参加が予定されているなど地域密着が定着している。

【重点項目への取り組み状況】

重点項目①	<p>前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)</p> <p>前回の改善課題は①評価の活用、②運営推進会議、③家族の意見、④重度化終末期等であった。このうち、①、③は改善済みであるが、②は会議の日程調整や議題に苦慮している、④は医療関係者の確保問題で中断しているなど、課題も残っている。今後の推進の取り組みを期待したい。</p>
	<p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>今回の自己評価は、全職員が原案を作成し、それを管理者がまとめた。ホームの事業計画は自己評価がベースとなっており、職員の気づきや思いが集約されている。平成20年度の事業計画に盛り込まれた運営目標は、「ケアの質の向上」と「地域密着」である。</p>
重点項目②	<p>運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)</p> <p>ホームの開催の思いは強いが、①会議メンバーの多忙、②開催回数が多すぎるとの批判、③テーマが少ないなど、これらがネックとなって開催が遅れている。ホーム運営では、入居者の重度化・終末期への対応や夜間想定避難訓練の実施など推進すべき課題もある。ホームではその解決には関係者の協力が必要と認識している。今後、運営推進会議の開催方法を工夫し、その活用を考えているので、その取り組みを期待したい。</p>
重点項目③	<p>家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)</p> <p>ほとんどの家族は、少なくとも2週間~1ヶ月毎にホームに来訪しており、その際には必ず入居者の近況報告をしている。また、月1回家族宛に入居者の健康状態、金銭管理などの状況について詳しく書いた職員自筆の手紙(領収書添付)を送付している。家族の意見を外部への表出方法として第三者委員(2名)を委嘱しており、その氏名、住所、電話番号を玄関に掲示し、家族には繰り返し説明している。</p>
重点項目④	<p>日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)</p> <p>ホームの周辺には小学校、幼稚園、公民館、公園などが設置され、地域の子供たちや住民の往来がある。ホームは公設民営のため行政との関わりが深く、地域の信頼も厚い。また、運営法人の地域重視の経営姿勢から、小学校や幼稚園との交流、行事への地域住民の参加、ボランティアの来訪等地域との交流が盛んである。この中で特記されるのは、社協のボランティアが経験・知識を活かして散歩介助やお話し相手など行っており、ホームが地域によって支えられていることがうかがえる。</p>

2. 評価結果（詳細）

（ 部分は重点項目です ）

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	ホームの基本的理念は、「もうひとつの我が家での安らぎと喜びのある生活」で、その生活は『のんびり・ゆったり・私らしく』である。これを具体化した独自理念（運営目標）として、「入居者の人生がより豊かになるよう職員の資質を高め、地域にあるホームとして地域とのつながりを大切に活動」を掲げている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	独自の理念は、毎日のミーティングの中で確認し合っている。日々のケアで意識していることは、「住み慣れた地域でその人らしく暮らすこと」であり、具体的には、①若い職員は、先輩の職員から入居者との関わりや地域との交流の持ち方を学んでいる②帰宅願望者には近所の協力を得て外出を見守っているなどである。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	ホームの立地条件の有利性や行政との連携により地元区長や民生委員等の関係も良好で、近隣住民やボランティアの訪問等も多く、地域との交流が活発である。今年7月に起きた地震の際は、深夜にもかかわらず、早速、区長や民生委員が駆け付けてくれ安否を気遣ってくれている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	自己評価は全職員が原案を作成し、それを管理者がまとめている。その作業過程を通じて反省や気づきがある。外部評価では別の見方や思いつかなかった点があるとして外部評価の重要性を認識している。ホームではこれらの評価の結果を業務の見直しや次年度の事業計画に反映させ改善に取り組んでいる。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	ホームでは、運営推進会議を通じて地域の意見を聴き、これを業務運営に活用することを目標に掲げている。このため、開催意欲は強いが、運営推進会議の議題（テーマ）選定や参加者との日程調整等に時間を要し、開催回数が少なくなっている。	○	運営推進会議の開催は、必要とされる開催回数（2ヶ月に1回）を満たしていない。これは適当なテーマが見当たらないこと等によるものであるが、今回の外部評価での話し合いの中で、取り上げるべきテーマが何件かある（例：入居者の重度化等への対応や避難訓練の実施等）ので、今後、開催回数を増やすことを検討していただきたい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	運営法人と行政とはホームが公設民営の経緯から設立当初から情報交換が行われている。また、両者間で毎月2回認知症に関する勉強会も行われており、これをサービスの質の向上に役立てている。調査当日、行政担当者が終日同席し、ホームのケアの理解に努めている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	ほとんどの家族は、少なくとも2週間～1ヶ月毎にホームに來訪しており、その際には必ず入居者の近況報告をしている。また、月1回家族宛に入居者の健康状態、金銭出納、職員の異動があればその旨を詳しく書いた職員自筆の手紙(領収書添付)を送付している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	サービスの苦情に関しては、ホームや行政の窓口は重要事項説明書に掲載し、第三者委員(2名)は玄関に掲示(氏名・住所・電話番号)している。家族への窓口周知の徹底を図るため、第三者委員も重要事項説明書に掲載することが望ましい。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	職員の離職は少なく、異動も必要最小限に抑えている。しかし、職員の健康状態やスキルアップ等のため、やむを得ず法人内部の異動がある。入居者は地元出身者がほとんどで、行事等を通じて法人内の交流も多いことからホーム以外の職員との面識もあり、交代職員によるリロケーションダメージは少ない。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	運営法人では、経営方針に人材の育成を大きな柱のひとつに掲げており、行政との勉強会のほか、認知症介護の外部研修は職員が計画的に参加している。これらの研修費用や資格取得のための通信教育の費用は、試験の可否にかかわらず法人が支援している。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	NPO県グループホーム協議会に加入し、管理者は仙北ブロックの役員をしている。同協議会の交換研修には全職員が交代で参加している。職員からの意見聴取でも交換研修は仕事上の気づきや悩みごとを解決する上で大いに勉強になったとしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心して、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居者のほとんどは、入居前にはホームに隣接している同法人が運営しているデイサービスセンターの利用者で、ホームと同センターとの間では交流が頻繁に行われていることから、入居の際には既に馴染みの関係ができています。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごしながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	日々の関わりから入居者の得意分野を把握している。例えば地元料理「はっと汁の調理」、「しめ縄作り」、「どじょう捌きの踊り」などが挙げられる。ホームでは日々の生活の中でこれらの力を発揮する場面を設けている。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者の思いや意向は、入浴等の個別ケア、食事等の集団ケア、ケース記録、家族や職員間の情報交換等を通じて把握している。具体的には徘徊者には感情面に配慮しながら、その思いをそっと聞き出し、それに沿ったケアに努めている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	本人の視点に立った支援に努めるため、東京センター方式を活用し、職員全員の参加の基にプランを作成している。特に本人のなにげない言葉や思いを重視し、それをプランに反映させている。作成したプランは家族に説明し同意を得ている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じて見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	月1回ケアカンファレンスを行い、ケアプランの見直しを行っている。しかし、体調に異常や変化がないことが多いため、プランの変更を必要とする人は少ない。これから季節が変わり、冬になれば屋内での生活が中心となるので、特に外出支援では夏場とは違ったその人に合ったケアを工夫していきたいとしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	重病や急病など特別の場合を除き、通院は職員が付き添い送迎している。また、お盆で帰省する入居者への外泊支援なども家族の要望に応じて柔軟に対応している。尚、地域には在宅介護の家族も多いことからホームとして何か支援できないか検討中である。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居の際には、認知症専門医を受診して症状を把握している。定期検診の受診先は協力病院とかかりつけ医で本人や家族の意向を踏まえて行っている。受診の際は職員が付き添いその医療情報は家族にも伝え、情報を共有している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	現在、重度の入居者(1名)は、本人や家族の希望で特養ホームに申し込み中である。ホームでは、医師等医療関係者の確保に目途が立たないことから、重度化や終末期へ向けた対応方針は定めておらず、今のところ状態の変化に応じた個々のケースについて、その取り扱い内容を主治医やホームから説明する程度に留まっている。	○	ホームでは、入居者の加齢に伴う重度化や終末期への必要性を強く認識しているものの、医師等の人材確保が困難としてその対応は進んでいない。実施には人的確保のほか①重度化への意思確認書や終末期への対応方針の作成、②職員への教育訓練など準備作業も必要となるので、先ずこれらの作業から取り組み段階的に進められるようにしていただきたい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	職員は入居者の尊厳を大切に、常に言葉遣いや態度に注意し、スピーチロックは厳に戒めている。入居者と話すときは地元出身者であれば方言を使うなど柔軟に対応している。個人情報保護の取り決めは玄関に掲示し、職員もこれを理解するとともに個人記録の管理を徹底している。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	入居者の生活歴や習慣を大切に、一人ひとりのペースに合わせて支援している。このことは、家族からのアンケートからもうかがえる。職員の話では入居者は入浴介助の時に本音を語ってくれるとのこと、それは、ゆったりとした気分のときは話が弾むからだという。これらの情報を支援に活かしている。		

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	一緒に食事をさせていただいたが、入居者、職員が同じ食卓を囲み会話を交わしながら食事を楽しんでいた。入居者は食欲旺盛で食べ残しはなかった。この食事の会話で入居者の好みや苦手なものを把握し、その情報を献立に活かしている。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	職員のローテーションの工夫により、曜日を問わず、午後8時まで入浴できる。入浴介助が終わったばかりの職員から聴取したところ、入居者から「気持ちがよかった、ありがとう」との感謝の言葉があり、そのことが職員のやりがいにもつながっている。入浴を拒む人には、声掛けや対応を工夫しながら支援している。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	入居者一人ひとりが生活経験が豊かであり、昔取った杵柄など潜在的な力を有している。食事や新聞の後片付け、家庭菜園の収穫、花壇の手入れ、掃除、洗濯物の折りたたみなど様々なところで役割を担っている。特に入居者同士の見守りなどちょっとした介護には喜びを感じる人が多いとのことである。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	出入りが自由のため自宅が近くにある入居者は頻繁に自宅に帰っており、ホームでは地域の協力を得て見守っている。戸外への外出は周辺には公園、ゲートボール場、メダカの孵化場などがあり、そこまでの散歩が多い。買物は近くに店がないため、通院で出かけたときを利用している。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	ホームでは全職員が鍵をかけることの弊害を理解しており、日中は玄関に鍵をかけていない。徘徊や自宅願望のため外出したときを想定して以前から地域の協力を得て対応している。また、隣接しているデイサービスセンターとの交流を深め、入居者の心理的不安や閉塞感の緩和に努めている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	地域住民が協力的であるため、地元地区の自主防災訓練のマニュアルにホームが援護施設として組み込まれ、救護担当者も決められている。今年7月に起きた地震の際は深夜にもかかわらず、地区長などの関係者が駆け付けてくれている。しかし、避難訓練は今年度はまだ実施していない。	○	今年度の避難訓練は8月に予定されていたが、地域の関係者の日程調整がつかないため遅れている。災害はいつ起きるかわからないので、地域や消防の協力を得て、特に夜間を想定した避難訓練を早急に実施することを期待したい。

外部	自己	項目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5) その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分の摂取量は毎日チェックし記録している。体重の測定は毎月の定期健診で病院に出かけたときに行っている。献立の栄養やカロリーは法人内の管理栄養士の助言や指導を受けている。尚、嚥下障害のある入居者にはミキサー食や刻み食を提供するときもある。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1) 居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	玄関を入ると広いリビングや居間が配置され、天井は高い天窓・吹き抜けのため陽光が射し込み室内全体に開放感がある。また、個別にくつろげる談話コーナーが二ヶ所あり、入居者の息抜きの場となっている。特に印象的なのは、地域の民間信仰の「かまど神」の面が壁に飾られ、入居者の心に安らぎを与えている。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室にはベットのほか、ダンスやテーブル・椅子など馴染みのものが置かれている。家族の写真や自分の肖像画を飾っていたり、窓を開けると花壇や小学校が見えるなど居心地が良い環境が整えられている。また、体力の衰えている入居者の居室に休息用のソファを貸与するなど、きめ細かな支援に努めている。		